関西大学『独逸文学』第48号 2004年3月

おしゃべりな骨たち

鬼 束 佳 代

0.

「口は禍のもと」「口八丁手八丁」「良薬、口に苦し」など、「口」に関する諺・格言は、世界各国に多く存在している。中でも「人の口に戸は立てられぬ」の諺は、いかに人間の口 —— 言葉 —— を統制するのが難しいかを端的に表したものである。

有名な『王様の耳はロバの耳』の話でも、秘密を抱え込んだ床屋は病気になってしまい、とうとう我慢できずに、掘った穴に秘密を吐き出してしまう。結局そのせいで、王様の耳の秘密は皆に知れ渡ってしまうのだが。いずれにせよ、言語をコミュニケーション手段として多用する人間は、秘密を自分一人の胸の内に秘めておくなど、殊更困難な生き物のようである。

ところが秘密を漏らしてしまうのは、生きている人間だけとは限らない。時には骨も隠しごとを語る役目を果たすのだ。その例が『グリム童話』の『唄う骨』や『ねずの木の話』に登場する骨たちである。

1.

『グリム童話』は周知の通り、兄ヤーコプ・グリム（1785-1863)、弟ヴィルヘルム（1786-1859）によって収集された、後期ロマン派の最も偉大な業績の一つである。200話にも及ぶこれらの童話は、単なる読みものとしてだけでなく、これからも連綿と継承されるであろう歴史の大切な遺産であるといっても過言ではない。

ところでこの童話集だが、一般的に主人公が幸せな結婚をして終わる、いわゆるハッピーエンドのメルヒェンが多いような印象がある。実際200話全てをその内容毎に分けてみると、結婚に関するものが97話もある。ところがその次に多い話は意外にも、結婚という華やかなものとは

対極的な位置にある「死」をモティーフにしたものであるということは、あまり知られていない。

「死」に関連する話は、200話中73作品（内、KHM番号がつけられていないものが13）もある。もちろん一つの作品の中に「結婚」と「死」の二つが介在するものも多いので、「結婚」と重ならないものだけを数えると43作品（内、KHM番号なし6）と若干減ってしまうが、決して少ない数ではないだろう。

「死」があれば当然その結果としての「遺体」もある。グリム童話に登場する遺体には、三つのタイプがある。

① 主人公（あるいはサブ主人公）の遺体。これは死んだ（副）主人公が、再び生き返るタイプで、『白雪姫』（KHM53: Schneewittchen）にあるように、この場合遺体はガラスの柩に入れられ、生きているかのように美しいままでいる。
② 主人公以外の遺体。『旅あるきの二人の職人』（KHM107: Die beiden Wanderer）に登場する犯罪者と思しき者達の遺体は、絞首台の上から主人公に大切なヒントを与える役を担っている。
③「遺体」を通り越した形である「骨」。

本稿では最後の「骨」について述べていくのだが、作品中に骨が出てくるものは全部で4話ある。これらのメルヒェンはどれも、『グリム童話』に限らず、一般的に「童話」あるいは「メルヒェン」と聞いたときに脳裏に浮かぶイメージとは、大きくかけ離れたものである。というのも、どの話でも平然と殺人が行われているのだ。いくらメルヒェンといっても、人殺しなど大人にとってもあまり気持ちの良いものでもないし、まして子供に読み聞かせるなどもっての外であろうから、専門家か、よほどのグリム童話好きでもない限り、これらの話を知らないというのが実状かもしれない。だが「一般受けしないもの＝くだらないもの」とは限らない。まして『グリム童話』は、単なる子供の情操教育のためだけの読み物として片づけられるものではない。グロテスクで地味な作品ではあるが、これら骨の登場する4つの物語は、十分注目に値するものである。

それではこれらのメルヒェンの中で、骨は一体どのような形で現れてくるのだろうか。次章では各作品のあらすじと簡単な注釈を添えた後、具体的に骨たちの役割を見てみよう。

2.

①『唄う骨』[1]

（あらすじ）ある国の王様が、イノシシを退治した者には、自分の一人娘を妻に与えるというおふれを出した。そこで二人の兄弟が名乗りを上げる。悪知恵が働く抜け目無い兄と、無邪気な弟。二人は別々の方角からイノシシの棲む森に入っていき、結局弟がイノシシを仕留める。ところが兄は、嫉妬のあまり橋の上で弟を殴り、弟は川に落ち死んでしまう。兄は何食わぬ顔で王様の所へ行き、お姫様と結婚する。それから数年後一人の羊飼いが、橋の下の砂の中から小さな骨を拾う。羊飼いがそれで角笛の歌口をつくって吹いてみると、骨が独りでに兄の悪事を唄い出した。奇妙に思った羊飼いが、王様の前で角笛を吹いてみせたことから、兄の殺人が露見。彼は袋の中へ縫い込まれ、川の中に放り投げられ、溺死する。その後王様は、殺された弟の骨を立派な墓に埋めてやる。

これは1812年1月19日、後に妻となる、当時18歳のヘンリエッテ・ドロテーア・ヴィルト（Henriette Dorothea Wild: 1793-1867）から、弟ヴィルヘルム・グリムが書き取った作品である。初版以降28番という位置は変わっていない。

この話も世界各地に分布しているが、日本にも『唄い骸骨』という類話が存在している。この話もグリムの『唄う骨』同様、ある男が嫉妬から、別の男を殺してしまうことによって話が展開していく。数年後、男は自分が殺めた者の骨だとは知らずに、歌を唄うしゃれこうべを見つけ、それを金儲けの道具にしようとする。ところがその計画は失敗し、男は打ち首になり、しゃれこうべは肝心なときに「唄わない」ことで、自分の無念を晴らしたという筋書きなので、グリムの『唄う骨』と全く同じというわけではないが、海を隔てた遠い地に類話が存在していることは、

1　KHM28: Der singende Knochen. In: Kinder- und Hausmärchen. Stuttgart, 1857.

非常に興味深いことである。

②『フィッチャーの鳥』[2]
（あらすじ）貧乏人の姿で家々を物乞いに訪れては、美しい娘を掠っていく魔法使いがいた。ある日美しい三人の娘を持つ家にも魔法使いが訪れ、一番上の娘を掠っていった。魔法使いは後日娘に「たった一カ所を除いて、家中を見て回っていい」と、鍵束を渡し、自分は旅に出ていく。しかし好奇心に負けた娘が禁じられた部屋を見たことを知った魔法使いは、彼女を殺しバラバラにしてしまう。魔法使いは次に二番目の娘を掠って来るが、彼女も又姉と同じ運命を辿る。ところが最後に掠われた妹は、彼に気付かれることなく禁じられた部屋に入り、二人の姉を再生させる。約束を守った三女を妻にすることにした魔法使いは、許嫁となった三女の言いつけで、彼女の実家にお使いに出される。娘は二階の窓のところに髑髏を置き、魔法使いの目を欺く。娘はその間に、体に蜂蜜をぬり、羽根布団の羽根を全身につけ、まるで鳥のような姿で人々の目を欺く。やがて帰宅した魔法使いは、留守中にやってきた娘の兄弟・親戚の手で召使いもろとも焼き殺されてしまう。

フリーデリケ・マンネル（Friederike Mannel: 1783-1833）とドロテーア・ヴィルトの二人の貢献によって、1812年の初版以来「悪魔的な存在によって試されるが、末っ子の策略によって救われるという、三人の娘達に関するメルヒェンの枠組み」[3]を持った46番目の話として紹介されている。

同じグリム童話集内にも、この話と似たようなものとして『盗賊のお婿さん』（KHM40: Der Räuberbräutigam）や『人殺し城』（Das Mordschloß）[4]あるいは『青髭』（Blaubart）[5]があるし、シャルル・ペロー（Charles

2 KHM46: Fitchers Vogel. In: Kinder- und Hausmärchen. Stuttgart, 1857.

3 Scherf, Walter: Das Märchenlexikon. Bd1. München, C. H. Beck Verlag. S. 317.

4 73aの話として第2版（1819）に紹介されたが、第3版（1837）以降は差し替えられている。

5 62aの話として第2版に紹介されたが、ペローの『青髭』と酷似しているため、第3版以降差し替えられている。

Perault: 1628-1703）の――その名も全くグリムと同じ――『青髭』も挙げられる。

その他の類話としては、ハノーファーに伝わるメルヒェンがある。但しこちらは、三人の娘達をひどい目に遭わせるのは人掠いの魔法使いではなく三人の小人であるし、三人の内の一人は運良く父親の元へと逃げ帰るが、戸に挟まれて踵を押しつぶされてしまうので、細かい部分まで全く同じというわけではない。しかし、小人達の目を欺くためのものを用意したり、何よりも体を血に浸し、羽根をつけて逃げるという、重要なモティーフは変わっていない[6]。

③『ねずの木の話』[7]

（あらすじ）子供のいない金持ちの夫婦のところに、待望の子供が生まれる。ところが母親は喜びのあまり死んでしまう。その後、夫は再び妻を迎えるが、彼女は先妻の子を疎ましく思い、その子を殺してしまう。そして事もあろうにその罪を、彼女の実の娘であるマリアに押しつけた。母親は死んだ義理の息子を細かく切り刻み、スープにし、それを何も知らない自分の夫に食べさせる。マリアは泣きながら兄の骨を拾い集め、ねずの木の下に置くと枝が動き出し、霧が出、そこから火が出てやがて鳥が生まれ出る。鳥はことの真相を唄ってまわり、とうとう少年を殺した母親を殺してしまう。

ポンメルン出身の画家、フィリップ・オットー・ルンゲ（Philipp Otto Runge: 1777-1810）が、少年達から聞き取った話を書き留めたものを出典としている。

この話では、憎悪から継母に殺された少年の骨から鳥が生まれ、その鳥がことの顛末を唄うのだが、ゲーテも又過去にこの歌を耳にしたらしく、『ファウスト』[8]の中で採りあげて、こう唄っている。

---

6 Vgl. Anmerkungen der Brüder Grimm. In: Kinder- und Hausmärchen Gesammelt durch die Brüder Grimm. Frankfurt a. M., 1999, S. 932-933.

7 KHM47: Von dem Machandelboom.

8 Goethe, Johann Wolfgang: Faust. Der Tragodie erster Teil. Philipp Recram. Stuttgart. Z. 4412-4420.

Meine Mutter die Hur′,
Die mich umgebracht hat!
Mein Vater der Schlem,
Der mich gessen hat!
Mein Schwesterlein klein
Hub auf die Bein′,
An einem kühlen Ort;
Da ward ich ein schönes Waldvögelein,
Fliege fort, fliege fort!

(僕の母さんひどいやつ／母さんは僕を殺したんだ！／僕の父さん道化者／父さんは僕を食べちゃった！／僕の小ちゃな妹が／僕の骨を拾ったんだ／涼しい場所で／僕はきれいな森の小鳥になった／そして飛び去ったんだ、飛び去ったんだ！)

そして又「骨の収集」というモティーフは古く、オシリスとオルペウスの神話にも窺える。この話の中では、オシリスとイシスが兄妹結婚をした後、オシリスの支配に対して反逆を企てた弟セトは、兄オシリスを騙して柩に入れ、ナイル川に投げ込んでしまう。

柩はやがて東地中海岸のビブロスまで流れ着き、イチジクの木に包み込まれた。一方このできごとを悲しんだイシスは、兄であり夫であるオシリスの入った柩を求めて彷徨う。その後ビブロス王の宮殿の柱となっていた木の中に、件の柩があるのを知り、これをエジプトへ持ち帰る。そしてセトによって更にばらばらにされた遺体の各部分を探し出し、オシリスを再生させている。

④『からす』[9]
(あらすじ) ある兵隊が仲間二人から袋叩きにされ、有り金全てを巻き上げられた挙げ句、両目までくり抜かれ、絞首台の柱へ縛り付けられ置き

9 Die Krähen. In: Kinder- und Hausmärchen 3. Auflage. Frankfurt. a. M. Deutscher Klassiker Verlag.

去りにされてしまう。ところが兵隊は、そこで耳にしたからす達の会話から目玉を再生し、お姫様と結婚する。後日その幸福にあずかろうと先の二人も絞首台の下へ行くが、逆にからすにつつき殺されてしまう。それを哀れに思った元兵隊は、二人の遺骨を墓に葬ってやる。

この作品は第3版で107aとして紹介された後、第5版で差し替えられたため、KHM番号はついていない。そのためこの物語は、あまり一般には知られていないが、動物達の会話を耳にしたことから、人間が何らかの利益を得るという点が非常に面白い話である。『グリム童話』にはこのようなパターンを持つメルヒェンが幾つかある[10]。本稿には直接関係がないのでこれ以上立ち入らないが、かつてのゲルマンの自然観をみる上で、大変興味深いモティーフである。

3.

以上が骨の登場する4作品の概要である。ここで骨の役割だけをまとめるならば、以下のようになる。

①『唄う骨』：羊飼いが河原で見つけた骨から笛の歌口を作り、それを吹くと笛が殺人事件を歌い出す。
②『フィッチャーの鳥』：窓辺に置かれ、フィアンセを騙す。
③『ねずの木の話』：義母に殺され、スープにされた男の子の骨を、妹がねずの木の下に埋めると、そこから鳥が現れ、義母の犯罪を唄い廻った。
④『からす』：悪い旅仲間に殺されかけた男が後に王となり、自分に手をかけたことから処刑された昔の仲間達の遺骨を墓に埋めてやる。

ここで①と④ではある共通の出来事が見いだされる。それは「殺人事件の暴露」である。どちらの殺人も秘密裏に行われ、目撃者もいない。『ねずの木の話』では、遺体をスープにして夫に食べさせることにより、

10 その他には『忠臣ヨハネス』(KHM6: Der treue Johannes)、『白い蛇』(KHM17: Die weiße Schlange)、『三つの言葉』(KHM33: Die drei Sprachen)、『旅歩きの二人の職人』(KHM107a: Die beiden Wanderer) 等が挙げられる。

妻は証拠隠滅を謀っている。通常ならば事件は誰にも気付かれることもなく、闇に葬られるはずであった。ところが「天網恢々疎にして漏らさず」の言葉通り、悪事はきっちり白日の下に曝され、犯人である兄も義母も、共に自らの命をもって罪を償う羽目になる。それもこれも皆「骨」の存在があってのことである。

上記の作品における骨の役割は、『グリム童話』がいわゆる創作童話（Kunstmärchen）ではなく、民間童話（Volksmärchen）である点を考慮すると、民俗学的にも重要な役割を果たしていることになる。

というのも、もしもこれらが兄弟によって創られたメルヒェンならば、たとえ骨が真実を話す役割を演じたとしても、それは兄弟二人の想像のたまものでしかない。ところが、それが民間童話となると事情はかなり違ってくる。そもそも二人の偉大な学者が、祖国ドイツの民間伝承を収集したのは、決して彼等の個人的趣味などではない。1789年のフランス革命、その後のナポレオンの台頭、1806年の神聖ローマ帝国の崩壊という時代、日々不安が募っていく社会情勢の中で、彼等は次第に民族意識に目覚め、自国の過去の文化、風土、民族、言語へとその目を向け、「ゲルマン的なもの」として、いわば「ゲルマン民族のアイデンティティ」を求めて、数多くのメルヒェンを集めるに至ったのだ。

そのため話の内容に関わらず、物語のそれぞれがゲルマンの思想・文化・伝統を何らかの形で含んでいるのだ。そしてそれは当然のことながら、『唄う骨』や『ねずの木の話』の骨たちにも、ゲルマン思想の名残が映し出されている。

事実、「人間のものであれ動物のものであれ、骨は原始民族の信仰において、重要な意義を持っていたと認められる」[11]と、ドイツの民間伝承を集めた本の中にも記されている。原始民族にまで遡らなくとも、ほんの数百年前、まさしくグリム兄弟達が生きていた時代においてさえ、骨は重要な役割を担うものであった。

骨はただ自分達の命を繋いでくれる、食糧としての動物達の遺物として敬われただけでなく、占い、お守り、薬、裁判や、時には魔術に用いられることもあった。

---

11 Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. Bd5. Berlin. 2000. S. 6.

そして『グリム童話』の中に登場する骨たちは、かつての民間信仰における役割を忠実に果たしているのだ。あるものは窓辺で見張り、あるものは犯罪を告げる。そしてあるものは再生を果たす、という具合に。

今日でも骨を敬う慣習は、「聖遺物」崇拝や、それを見るための巡礼・観光が相変わらずであるのを見ても分かるように、今も尚、現代に生きる人々の心の中にも、色濃く残されている。

ところで『唄う骨』や『ねずの木の話』のメルヒェンだけに限らず、実際骨はなかなかおしゃべりな存在である。といってももちろん、発話のための器官を持たない骨が実際に言葉を発するわけではない。それは「人間」の手を借りて初めて可能になるものである。

例えば発掘した骨に、然るべき処置を施したなら、彼等は自分たちの過去の姿について様々なことを語り出す。体型、特徴、年齢、性別、死因は何か、病気なのか事故死なのか、あるいは自然死なのか。動物ならば、敵に生のまま捕食されたのか、それとも人間によって調理され死んだのか等々を、次から次へと物語る。又頭蓋骨が残っていれば、それに肉付けをし、復顔することも、どんな声をしていたのかを割り出すことも可能である。

昔は呪術師、あるいは鳥や楽器が骨たちのおしゃべりを助け、それを一般の人々に伝えてくれた。今では科学・技術の進歩にともない、コンピューターに依存するところが大きくなってしまった。だが我々がほんの少し耳を傾けさえすれば、骨たちのおしゃべりが今も尚聞こえてくることには変わりはない。